様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　21　年　3　月　31　日現在

研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2006～2009
課題番号：18202008
研究課題名（和文）　プラハとダブリン　－20 世紀文学の総括の試みとしての『二都物語』

研究課題名（英文）　Prag und Dublin —*A Tale of Two Cities* als Zusammenfassungs-versuch der Literatur des 20. Jahrhunderts

研究代表者
城　　眞　一（JO　SHINICHI）
東京医科大学・医学部・教授
研究者番号：60424602

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学＞英米・英語圏文学
キーワード：ナショナリズム、言語危機、神秘思想、リルケ、カフカ、イェイツ、ジョイス

１．研究計画の概要

プラハとダブリンという二都市に注目して、20 世紀文学の特質を総括することを目的とする。20 世紀を代表する文学者、カフカ、リルケ、イェイツ、ジョイス、ベケットらが、欧州の西端と東端に位置する周縁都市に偏在することは、決して偶然ではない。辺境に生じた、言語をはじめとする諸々の危機的抗争が、世紀転換期の世代に創造的な活力を与えたがゆえと考えられる。年度ごとに政治、言語、宗教の各側面から、順次、両都市出身の詩人たちを比較考察し、その創作の源泉に光を当てた。最終的には、20 世紀の文学思想の本質を解明する。

２．研究の進捗状況

（1）初年度は、全体の展望を確立しつつ、年次課題「ナショナル・アイデンティティ」の側面から文学作品を比較考察した。計３回の研究報告集会、外国人研究者の招聘、多数の学会報告、論文、編著書の刊行等によって、プラハとダブリンの、２０世紀初頭の政治状況下での詩人たちの内面が解明された。ユダヤ性を含めた種々のナショナル・アイデンティティの喪失と相克と再構築、帰属ないしは離反といった心的ダイナミズムが、この二都市出身の詩人たちの創作の梃子であることが跡付けられた。

（2）第 2 年度は、課題「言語危機」のもと、計 3 回の研究報告会、外国人研究者の招聘、ジョイス協会におけるシンポジウム等の研究報告、数篇の論文ないしは編著書等の成果を得た。いわゆる「言語危機」は、本来はマラルメとニーチェに遡ること、二都市出身の詩人に共通する「言語懐疑」からの創造が、隠喩や換喩の独自性を産み（リルケ、イェイツ、カフカ等）、テキストの意味の「重層性」を招いたこと（ジョイス、リルケ、カフカ等）が指摘された。諸領域での抗争の絶えない二都市に生まれた詩人たちは、とくに言語象徴を先駆的に相対化し、客体化し、志向対象としたが、一方で自明の母語に護られた故郷を失い、言葉と事物への原初的問いからの再出発を余儀なくされていたことが、確認された。

（3）第 3 年度は、「神秘思想」を課題として、3 回の研究報告会、外国人研究者の招待講演、英独合同シンポジウムをはじめとする研究報告、１０余篇の論文ないしは編著書という多くの成果を挙げた。政治と言語に関わる危機的状況の克服過程において、「神秘思想」ないしは神話的形象が、詩人たちに豊かな発想を供給していたことが、リルケやジョイス等の作品に即して論証された。「薔薇」と「ユダヤ性」を巡る、上記のシンポジウムは、主題の斬新さと横断性により、欧州比較文学研究の新局面を開いたと評価された。

３．現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

（理由）

第４年度に予定されていた 6 名分の外国人研究者の招聘事業を前倒しして、すでにこの３ヶ年に３人を招待した。その結果、国際交流がいちはやく深まり、多大な刺激を受けたことにより、学術上の好結果が生じた。

４．今後の研究の推進方策

（1）研究予算の配分が、最初の 3 年度においてはプラハ研究者に偏っていたことを、第 4 年度では、遅ればせながら是正する方針で

ある。
（2）国際交流にかんしては、上述のごとく（項目 3.）、第 4 年度の予定がすでに先行的に実施されているので、第 4 年度では招聘事業の規模を適正化しつつ、逆に分担者を外国へ派遣する等の方法により、双方向の国際交流を図る。
（3）これまでは年次テーマに即した単一の視点からの考察が主であったが、最終年度は、当初の研究目的を実現するために、論文集編纂・講演会ないしはシンポジウム開催・国際シンポジウムでの発表等の多様な方法によって、総括と発信の年とする。

５．代表的な研究成果
〔雑誌論文〕（計 19 件）
①金子孝吉、メルヒオール・フィッシャーのダダ小説『ゼクンデ・デュルヒ・ヒルン』について、彦根論叢、第 376 号、33-57、2009 年、査読無
②夏目博明、アイルランドの外のアイルランド人、青山スタンダード論集、第４号、139-153、2009 年、査読有
③城眞一、リルケにおける詩と政治（序）、東京医科大学雑誌、第 66 巻４号、556-559、2008 年、査読無
④結城英雄、『ユリシーズ』を読む－百の Q&A・・６、すばる、５月号、282-292、2008 年、査読無
⑤Yoshihiko Hirano, Huchel und Berlin. Nomina incognita in Celans Gedicht „Ein Blatt“ ,Celan-Jahrbuch(Heidelberg:Universitätsverlag Winter)、９巻、221-232、2007 年、査読有
⑥河中正彦、リルケとカフカ－リルケの『始原の書』とカフカの『ヨゼフィーネ』、山口大学　独仏文学、28 号、109-122、2006 年、査読無

〔学会発表〕（計 14 件）
①吉川信・平野嘉彦・戸田勉・三谷研爾、シンポジウム：プラハとダブリン－20 世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス、『イェイツの薔薇－もしくは薔薇の外部』（吉川）、『リルケの薔薇、もしくはナショナリズムの不能－イェイツと照合しつつ』（平野）、『プラハとダブリン－ジョイスとユダヤ人』（戸田）、『カフカにおける<交通>とアイデンティティ』（三谷）、日本独文学会秋季研究発表会、2008 年 10 月 13 日、岡山大学
②Yoshihiko Hirano,Die morbide Moderne. Ein Ansatz zur Motivik *Benjamin und George*, 韓国独文学会ソラク・シンポジウム Jahrhundertwende – Der Aufbruch in die Moderne,2008 年 10 月２日、慶州・コーロンホテル
③平野嘉彦、ボヘミアの<儀式殺人>、関西チェコ/スロバキア協会、2008 年３月８日、兵庫トヨタ本社ビル
④吉川信・戸田勉・平野嘉彦、シンポジウム：ジョイスと都市/ジョイスの諸都市、『都市と年-Dublin-Trieste-Zurich-Paris』（吉川）、『ジョイスと都市－都市のユダヤ人』（戸田）、『リルケとトリエステ－もしくは地中海』（平野）、日本ジェイムズ・ジョイス協会第 19 回大会、2007 年６月 16 日、青山学院大学
⑤河中正彦、プラハとダブリン、関西チェコ/スロバキア協会、2006 年 11 月 25 日、兵庫トヨタ本社ビル

〔図書〕（計８件）
①平野嘉彦（編・訳）・柴田翔（訳）・浅井健二郎（訳）、筑摩書房、カフカ・セレクションⅠ[時空/認知]、Ⅱ[運動/拘束]、Ⅲ[異形/寓意]、2008 年、343・315・329
②Yoshihiko Hirano（共編・共著）, Königshausen & Neumann(Würzburg), Kulturfaktor Schmerz.Internationales Kolloquium in Tokyo 2005.,2008 年、250、所収論文：“PAIN HAS AN ELEMENT OF BLANK.” Der Diskurs des Schmerzes bei Dickinson, Rilke, Hölderlin und Celan (207-217)
③三谷研爾（責任編集）、大阪大学出版会、ドイツ文化史への招待　芸術と社会のあいだ、2007 年、291、所収論文：「存在と帰属」カフカ三代の歴史から(181-199)
④吉川信（共著）、言叢社、死と未来の神話学、2007 年、350、所収論文：オシリス神の活用－ジョイスとロレンスの復活神話(25-41)
⑤吉川信（共著）、未来社、歴史の悲歌が聞こえる、2007 年、219、所収論文：ジョイスはデ・ヴァレラの夢を見たか(103-129)
⑥平野嘉彦、みすず書房、ホフマンと乱歩人形と光学器械のエロス、2007、132